

授業の一部を英語で行う試み

諏訪 邦夫、立原 敬一、大塚 徹、石田 等

帝京短期大学ライフケア学科臨床工学専攻

Trial of Using English Language in Teaching

Kunio Suwa, M.D., Keiichi Tachihara, Tohru Ohtsuka, M.B. Hitoshi Ishida, Ph.D.

Department of Clinical Engineering, Faculty of Life-care, Teikyo Junior College

Abstract

The first author of this manuscript has begun using English language for his teaching. It was triggered by the knowledge of a good number of students challenging the EIKEN Test (The EIKEN Test in Practical English Proficiency). We want to contribute to their intention of studying English. At the moment, it is limited only to a small part, some 5 to 10 minutes out of the 90 minutes lecture. It is too early to judge its effect. If we find the effect in the affirmative, we may extend its time and volume, and hopefully we may ask other teaching staff to follow the similar path. In one of the term-end examination, we added questions in English to be written their answers in English as well. To our pleasant surprise, 75% of the students selected these questions and answered in written English.

要 旨

本論の第一著者諏訪邦夫は、本年度から講義の一部を英語で行うことを開始した。きっかけは、学生の一部が英検（実用英語技能検定）を通過していると知った点で、せっかく英語をマスターしたいとの意欲があるのだから、それを継続させたいと感じた故である。

英検受験の人たちに限らず、学生たちの一部は外国留学や見学の機会があるはずであり、他の学生も外国人と働き見学者に説明する機会がありそうである。

したがって英語学習一般は望ましく、さらには TOEIC 受験も促したい、そんな準備に少しでも備える助けになって欲しいとの意図である。

期末試験に英語で問うて英語で記述する問題を 2 題含めたところ、75%の学生がこの英語記述問題を選択した。

序 文

本論の第一著者諏訪邦夫は、本年度（2013年度）から講義の一部を英語で行うことを開始した。きっかけは、学生の12人が英検（実用英語技能検定）を通過していると知った事実である。学生が英語をマスターしたいとの意欲を示す事実から、その意欲と勉強を継続させたいと感じたのが理由である。

もう一つの理由は、彼自身の個人的な経験で、英会話の学習が偶然に留学につながった事実である。英会話を学習した経験は決して豊かではなかった。学生時代に英会話学校に4ヶ月通い、それが「英会話力をつけるのに直接役立った」とは感じなかったが、「英会話はこんな風にすれば身に付きそうだ」という感覚は抱くのに役立った。

当時のインターンの時代に、友人たちと誘い合い、英会話の先生に病院に来てもらって、数人で英会話を学習した。さらに年度末の3月の国家試験受験に際し、当時の国家試験はやさしく合格自体に不安はなかったため「ついでに英語の試験も受けよう」と相談がまとまった。「国家試験はやさしいけれど、まったく勉強しないのも義理が悪いから、ついでに英語で受験勉強しよう」との意図である。それが ECFMG 試験（米国の病院で臨床研修を行う資格試験）であったが、その時点では「試験があったから受けた」だけで、実際に外国へ出かけて研修をする意志や意欲は持っていなかった。

国家試験に合格して国内で研修を開始して間もなく、上記 ECFMG の合格通知を受け、それを主任教授に伝えたところ、「それでは君、留学したまえ」と促

されて急にその気になったのが1962年4月で、一方で病院を探し、もう一方で、英会話学習を再開した。1962年末には研修医として受け入れの連絡を貰い、1963年にボストンの病院（マサチューセッツ総合病院）で研修を開始している。

いろいろ偶然に助けられたが、とにかく糸口が役立ったのは事実である。

英検合格の人たちに限らず、学生たちの一部は今後外国留学や見学の機会があるはずであり、また学生の一部は外国人と働き、見学者に説明する機会がありそうである。

英語学習一般は望ましいことであり、特に TOEIC 受験も促したい、そんな準備に少しでも備える助けになって欲しいというのが意図である。

方法

現時点では、講義冒頭のスライドの2～5枚程度を英語化したものを加え、そこでは英語で話しており、時間にして90分の授業のうち3～5分程度である。実力テストの一部にも英語の問題と英語で答える課題を提示した。特に記述問題に、「英語で記述すれば少し加点」と付言した。

結果と考察

学生の受け入れは良好だが、私自身側から英語の講義をするだけで積極的な情報交換などは計っていないので、試みの成果を云々するレベルまでは進んでいない。もし、成果が肯定的なら、現時点でスライド数枚、時間で最長10分の上限をゆるめて、量を増やしたい。また、第一著者に限らず教師群全員にも協力をお願いしたい。さらには、施設全体に広げる可能性も皆無ではない。

英語を加えた授業を4月から開始して、7月末の期末テスト（医用工学）の記述式問題を5題課し、そのうちの2題を英語で書いて、「英語の問題は英語の回答を歓迎する。英語の回答は採点に加点する」とコメントを加えた。問題は5題で、選択式で3題選べば満点がとれる。

意外にも、英語問題を選んで書いた人が33名／44名（75%）に達した。内容はごく簡単な記述から詳細な記述まで、程度もレベルの高くないものから見事なものまで、幅が広い点にも感心したが、何よりも75%という高率の学生が英語記述にチャレンジしてくれたことに感激した。

なお、この件を学長にお知らせしたところ、学長も飲んでいらした。

結論

本稿の第一著者が、担当する講義の一部を英語で行う試みを開始した。その意図と狙い、施行方法、結果、期末テストに英語記述問題を課して、多数の参加の得られた点、今後の見通しなどを考察した。

参考文献 特になし。



図表

図はスライドの例（英語と日本語を並べる）。実際の授業では逐次的に提示している。

表 英語の講義の将来像

個人の授業の英語施行の部分を、さらに充実させるそれを第一著者に限定せずに、臨床工学コース全体に徐々に広めるさらには、帝京短期大学全体に広める可能性も？